立教大学共生社会研究センターニューズレター　PRISM -プリズム-

PRISM

No.17　2022年2月15日
発行：立教大学共生社会研究センター
住所：〒171-8501　東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL：03-3985-4457　　FAX：03-3985-4458
E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/

No.17, Feb 2022
Research Center for Cooperative Civil Societies, Rikkyo University

センターの日常は資料を中心に回っています

平野 泉（立教大学共生社会研究センター・アーキビスト）

センター所蔵資料の全体を資料の性格という視点からみると、だいたい3つに分けられます。まずは書籍。これは、鶴見良行文庫や宇井純公害問題資料コレクションの一部をなしているものも含めて1万点ほどになります。次に、市民団体や個人が随時刊行するミニコミ。これは現在も毎日少しずつ増えており、現在28万点を超えています。そしてもう一つが、人々が日常的に活動する中で生み出す「アーカイブズ」（archives）で、大小約50群を所蔵しています。アーカイブズは小さなものでも段ボール数箱といった量になるので、受け入れにあたっては運営委員会で慎重に判断します。

「どう整理するのか？」という作業者の視点からみると、書籍とミニコミはほぼ同じです。一点ずつラベルを貼り、必要な情報をデータベースに入力し、一定のルールで書架に並べる。この一連の作業は主としてセンタースタッフが行なっています。

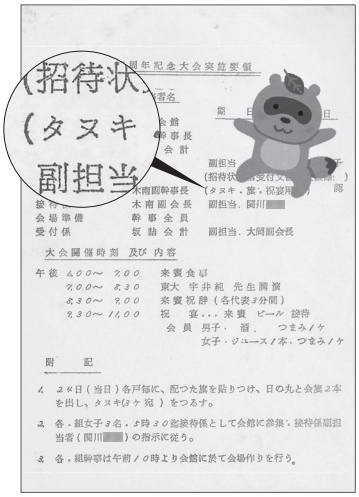
それとは異なり、アーカイブズにはノートやメモ、ビラやポスター、帳簿や名簿、手紙や写真、録音テープやビデオなど、様々な媒体の様々な資料が含まれますし、受け入れ時点での整理の程度もまちまちです。きちんとした性格の人はテーマごとにファイル、そうでもない人は段ボールにがさっと――個人や組織の性格や仕事の進め方を反映して、アーカイブズは一つ一つ個性をもつまとまりになるのです。そうしたアーカイブズと日々向き合っているのが、研究者でもあるリサーチ・アシスタント（RA）のみなさんです。

搬入された資料群

アーカイブズがセンターに搬入されると、まずは段ボールを開封して内容を確認し、受け入れ記録を作成します。また、紙がぎっしり詰まった段ボールは重いので、ファイルボックスなど扱いやすいサイズの容器に中身を移し替えていったん書庫におさめます。

いよいよ本格的に整理するときが来たら、まずは全体をざっと見通します。これは、整理者がはじめて資料と向き合う大切な時間なのですが、複数で取り組むとじつに楽しいのです。誰かが「こんなのがあった！」と叫ぶと、みんなで眺めて「ほほー」と感心したり。「これなんだろう？」という疑問が、後から出てきた資料であっさりとけたり。

2019年4月23日、長年書庫で眠っていた黒井火力反対運動資料の整理にいよいよ取り組むことになりました。整理を担当するRAの長谷川達朗さん、ボランティアの小野田美都江さん・堀越比菜子さんと、段ボール6箱分ほどの資料をどんどん箱から出して確認していきます。このアーカイブズの作成者であり運動のリーダーであった熊倉平三郎さんは、教育者として敬愛された方。多様な資料を綴じた厚紙には達者な筆文字で表題が書かれ、同時代の他の運動資料とはちがった風格があります。そんな中に「戦勝五周年記念大会実施要領」（ファイルID：S17-2056）と題されたB5版の資料がありました。1972年8月24日に予定された大会（宇井純さんの講演も）の準備のために作成された文書で、当日の責任分担やスケジュールなどが書かれています。そして「物品祝宴用品手配」の担当者名のあとには「（タヌキ・旗・祝宴用品）」と――――え、タヌキですか？？――もちろん「タスキ」なのですが、集会のためにタヌキが手配される姿を想像してみんなで大笑いしたあの時を思い出すと、今も顔がほころんでしまいます。



さて、こうした作業を通して見えてきた「だいたいこんな感じで整理できそう」という感触を方針にまとめたうえで、多くの場合は現状を維持したまま仮のIDを付与しつつ、ファイルや封筒、箱などのまとまりを単位とした目録を作成していきます。隣同士に置かれた資料は、無関係に見えてもじつは関連している可能性が高いので、安易に順番は変えません。整理方針も適宜見直し、より詳細な目録が必要なら作成しますし、資料の編成（配列）を変更したほうがよい場合は最終段階で変更します。

最後に、資料の状態に応じて中性紙の封筒やファイルに入れ替え、ほこりや紫外線から守るためにボックスに収納します。利用者の方には、目録をチェックして「これが見たい」という資料をIDで指定していただければ、スタッフが書庫からその資料の入ったボックスを出納して閲覧室でご覧いただくことになります。

一方、音声や動画などのテープは再生機器がなければ内容を確認できず、保存のためにも紙とは異なる処置が必要となります。そのため紙資料のように「ざっくり」整理するというわけにはいきませんし、媒体の特性やデータのとり方にも、専門的な知識が求められます。

整理を終えて配架された資料群

というわけで、今号ではセンターで資料整理に携わるスタッフ・RAが、担当する資料と作業についてご紹介いたします。一人一人の資料への思いが、伝わるでしょうか。

ミニコミ誌のキーワード付与作業

川路 さつき（センタースタッフ）

当センターでの私の主業務はミニコミ誌の受入作業です。以前、別の職場で図書館関係の作業をやっていたので、雑誌の受入と同じ、と当初は思っていました。実際、継続受け入れのミニコミ誌であれば、巻号、発行年月日、ラベル番号など要領は同じです。一つだけ大きく違うのがキーワードという項目で、実はこれが曲者でした。候補としてあらかじめ決まったキーワードがあるわけではないので、文章の中からこれはと思う言葉を拾っていくことになります。明確な主張を持っている文章や情報誌であれば作業はそれほど難しくはありません。

当センターのミニコミ誌の大部分は、「市民の社会活動」と関係しています。当然キーワードという観点から見れば、迷うことはあまりありません。悩んでしまうのは、文芸誌や雑感などの文章です。創作作品や、随筆、回想記など、読んでいる分には楽しく面白いのですが、キーワードと言われると困ってしまいます。取りあえず筆者の名前や文章に出て来る固有名詞などを抜き出していますが、本当にキーワードとして適切だろうかといつも気になっていました。文芸誌などは「市民の社会活動」とはあまり関係がないのでは、とまで思ったこともありました。

最近仕事とは関係なく、ある文章を読んでいて「社会運動」と「文芸」が自然につながっている場合があることに気付かされました。それは、「山本明コレクション」を整理した方々の論文*です。山本明は社会学者ですが、コレクションには映画に関する資料が多く含まれていたようで、論文の中では傾向映画製作の過程や上映運動について考察されていました。傾向映画というのは階級社会を描いた映画作品群のことだそうで、プロレタリア芸術運動の一つです。かつて労働運動としての芸術活動が盛んな時代があり、その流れの中で演劇や文芸も成果を上げました。そしてこうした活動の延長上に位置づけられる今日の文芸活動もあるのだということを知りました。別の言い方をすれば、今日の文芸活動の中にはその源を「社会運動」に遡ることが出来るものがあり、それらはその関連において理解すべきなのだと、自分の無知を思い知らされました。知識のない自分の目には陰影のないぼんやりしたものにしか見えない資料が、実は歴史的な視点の中でくっきりと浮き上がってくることがあるのだと。対象分野に造詣の深いアーキビストであれば、より適切なキーワードを付けることが出来るでしょう。データベース作成にもアーキビストが必要ですが、今は日々届く資料（殆どは寄贈です）を前に、楽しく、時に悩みつつ受入作業を続けています。

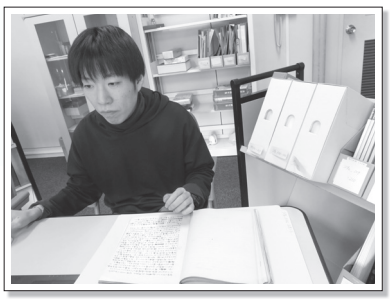
＊『人文学報(2021)』（京都大学人文科学研究所）No.116 <特集:山本明コレクション>

救援（救援連絡センター）632号（2021年12月10日発行）

タブロイド版の月刊誌です。「傾向映画を観る」という連載コラムがあり、階級闘争を含め社会問題を扱った作品を紹介しています。当然ミニシアター系が多くなりますが、韓国映画などでは重くなりがちな問題を上手く娯楽映画に仕上げてヒットさせていますね。一般市民に問題意識を持たせる方法としての芸術活動の良い例でしょう。社会問題とは関係なく、映画批評として面白く読めます。

「Withコロナ」ならぬ「Withツルミ」

安藤 直之（センターRA、立教大学大学院文学研究科教育学専攻研修生）



私は今「S09a_鶴見良行文庫追加分」という資料の整理に携わらせていただいています。鶴見良行さんは言わずもがなアジア学・人類学の研究者です。人類学において、それまで人に焦点が当てられていたのに対し、鶴見さんはバナナやナマコといった食べ物の流通に焦点を当てることで独自の研究を切り開かれました。

本資料群の整理を開始したのは約二年前に遡ります。資料全体としては段ボール六箱分ですので、それほど多くはありません。資料整理の手順としては概ね、①資料全体の概観②整理計画の作成③実際の資料の整理・保存、となります。全体を概観した際、「（作業期間としては）半年、長くても一年くらいかな」。そう思い、始めたこの作業。いやいやどうして。そんな簡単なものではありませんでした。新型コロナウイルスの影響により、一時期、センターでの業務ができず直接資料に触れられなかったとはいえ、なかなか終わりの見えないこの資料。どうしてこんなにも時間を要しているのか、それには次のような理由があります。

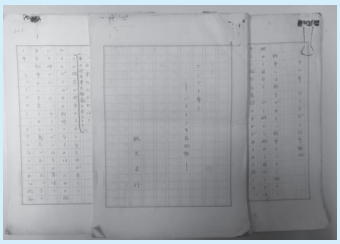
本資料群は鶴見さんの妻千代子さんが亡くなられた後、鶴見さんの生前に親交のあった藤林泰さんを通じて、このセンターに寄贈されたという経緯があります。言わば「鶴見さんのご自宅からとりあえず出された資料」です。それゆえ、資料の中には千代子さんの物が含まれていたり、また、個人情報保護の観点から公開できない資料が紛れていたり、と頭を悩ませることが多々あります。なかでも最も頭を悩ませるのが写真類です。どこで撮影されたのかわからない写真が一枚だけ資料と資料の隙間からひょっこり出てきた時は思わず溜息が漏れます。

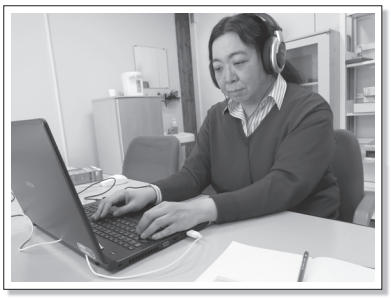
こうして整理計画の見通しが立たなかったものの、作業開始から2年近くが経ち、アーキビストの平野さんと相談を重ね、ようやく整理・保存の段階に移ることができました。

しかしながら、資料の整理作業は悩ましいだけではありません。資料を直に触れることで鶴見さんの関心の端緒が垣間見えるところは面白く興味深いです。たとえば写真のような資料であれば、レンズ越しではありますが、鶴見さんが見ていた世界がそのまま写されています。そう思いながら写真を見るたびに、つい手が止まってしまいます－作業が遅々として進まない一つの要因かもしれません。

まだもうしばらくは手のかかりそうなこの資料。引き続き「withコロナ」ならぬ「withツルミ」として整理に励んでいきたいと思います。

鶴見さんの自筆資料についてはノートやメモ等が十数点遺されていますが、「鶴見良行生原稿」と題されたスライドファイルがひときわ目を引きます。このスライドファイルの中には既に発表されている原稿がいくつか封入されているだけでなく、発表に至らなかった「アジアを奪う－バターン半島物語－」といったタイトルの原稿も同梱されていて、大変貴重なものです。整理が終了したあかつきには是非手に取って頂きたい資料です。





「脱ひっそり」をめざして―共生社会研究センターの音声資料の整理―

宇野 淳子（センターRA・研究員）

1985 年に練馬区内で開催された「さぶろく四季の道完成を祝う会」を録音したテープ（下）はセンターでデジタル複製をしました。この音声には、放射 36 号道路対策連盟や自治体、鉄道会社、建設会社等の立場を超え、合意形成・道路の運用に至ったことを祝う朗らかな会の様子がそのまま残されています。旧所蔵者の平尾英子氏はこの音声を聞き「何かひとりじめにするのがもったいなく」て『36 連盟ニュース』No.15（上）を作ることにしたと送付状に記しています。

住民運動・市民運動資料コレクションの中には「ひっそり」と音声資料が入っています。「ひっそり」とした存在である理由は主に2つです。1つは音声資料だけのコレクションはなく、多くは文書が詰め込まれている文書箱の片隅に「ひっそり」とカセットテープが10本ぐらい収められていること、そして2つ目はなかなか利用提供できていないことです。

音声資料の整理を始めた頃は、どのコレクションにどのくらいの量、どのような媒体の音声資料があるのかがわかりませんでした。そこで、全コレクションを対象として音声資料の概要調査を行ったところ、約3分の1のコレクションに、主にカセットテープが含まれていることが分かりました。それらをリスト化したまではよいのですが、カセットテープは経年劣化をするため、見た目には普通であっても再生機にかけるとテープが切れるのではないかと心配なものやそもそもカセットテープの部品が脱落しているものもあり、再生することをためらうことが多くあります。比較的近年に録音された一部のカセットテープはセンターでカセットデッキとICレコーダをつないで保存の目的でデジタル複製を試み、また、一部の音声は同様の目的で音声を扱う専門業者に依頼して音声をデジタル化しました（カセットテープはデジタル複製後も大切に保存しています）。

浜岡原発関連資料に含まれる音声資料は、寄贈者のご寄付により専門業者によるデジタル複製ができました。現在、公開したいという寄贈者の思いを尊重しつつ、プライバシー等の保護を担保するために作成した基準を基に、音声を聞きながら公開判定を行っています。基準を作ったら公開判定はサクサクと進むと思っていましたが、「非公開」としたら二度と誰も聞かなくなるという責任の重大さから聞き逃していないか気になると同じところを再度聞くなどして作業が進まなかったことは反省です。また、音楽などが含まれる場合は寄贈者以外の方が著作権を持つので非公開、と基準を定めましたが、音楽はテレビ放送された歌だけではなく、ピアノのバイエルの演奏が背景音として副次的に入っていることもある等、作業により初めて気づくこともありました。これらの気づきを作業の検証のために記録しながら、公開判定を続けています。

音声資料を聞くと、住民と企業といった、利害の異なる立場の方々の協議であっても、そこには長年向き合ってきたからこそ成立する人間関係があることを感じます。その雰囲気は音声として現在まで真空パックのように残されてきており、それに触れられることが音声資料の最大の面白さです。その面白さを多くの方に感じていただけるよう、「脱ひっそり」をめざして整理を続けます。

市民運動資料の整理を経験して

李 英美（センターRA・研究員、立教大学兼任講師）

「市民の意見 30 の会」が NY タイムズに掲載した湾岸戦争反対の意見広告に、米国市民が寄せた手紙です。手紙と封筒のオリジナルとコピーがあります。これらの手紙は、市民の意見 30 の会編『「アメリカは正しい」か－湾岸戦争をめぐる日米市民の対話』（第三書館、1991 年）で読めますが、実物の封筒をみると、吉川さんらの手元に届くまでの道のり（消印や経由地の痕跡）や、日本の市民運動側が記したと思われる小さな文字も発見できます。

現在、私が整理に関わっている吉川勇一さんの資料は、センターですでに公開されている「S01_吉川勇一旧蔵「ベ平連」関連資料」(以降「吉川資料」)の「追加分」です。「追加分」には、吉川さんが集めた/の手元に集まった市民運動の団体別ファイル(ビラ、チラシ、パンフ類含む、新聞・週刊誌などの切抜)や、ベ平連関係のノート・スクラップブック・手紙類、そして市民運動に関する機関誌・ミニコミがあります。公開されている吉川資料が主に 1960年代後半～ 70年代にかけてのベ平連運動を軸とした資料群であるのに対して、「追加分」は、1960 ～ 2000年代に至るまで、ベ平連の活動以後の多岐にわたる市民運動の資料が含まれているのが特徴です。

私と同じくRAの今井さんと二人で「追加分」の整理作業を始めたときには、すでに埼玉大での受け入れ時に一旦は整理がなされていたというのもあり、大半はテーマ、活動別にファイルタイトルがあり、ミニコミ資料に関してはabc 順、五十音順に分類がされていました。加えて、日付が確認できる状態の良い資料が多く、なにがあるのか全くわからない、という手付かずの状態ではなかったのは少し安心？でした。こうして、ある程度の見通しがある(と思われる)段階から作業は始まり、手順としては、どんどん資料データをファイル・アイテム単位で入力して目録作成に努めました。

比較的、順調な滑り出しのように思えましたが、苦戦したのは、入力した資料データ一覧を見つめながら、改めて資料全体の秩序を考え、体系立てていくことでした。実務の仕事に長けていたと言われている吉川さんの人柄も関係してか、資料全体はきれいでまとまりのある印象がありました。一方で、吉川さんの晩年に至るまでの市民運動家としての生き様は、団体名だけでも200にのぼるミニコミ・機関誌や、さまざまな団体別ファイルなどにもあらわれ、これら膨大な運動体の資料同士のつながりをみいだすのが難しいところでした。この悩みは、すでに公開されている吉川資料の目録と「追加分」の目録を、一つに突き合わせていく過程でも生じました。ですが、こうした悩みは、吉川さんの「追加分」資料の魅力・面白さでもありました。一見なんの関係もなさそうな運動同士が、実は人脈的にも深いつながりがあったり、テーマを跨いでつながる人びとの関係性が見えてくると、バラバラに見えていた運動が繋がって意味を持つようになりました。個々の偶発的な要因が、その後の運動の組織化・発展につながっていたりと、市民運動の変遷を人びとの関係性から捉え返すことのできる資料群であると思いました。こうした資料の魅力を存分に伝えられるよう引き続きがんばります。

センター利用案内

★ご利用には事前予約が必要です。また、マスク着用・手指消毒など、新型コロナウイルス感染防止対策にご協力ください。

利用資格

- とくにありません。立教大学共生社会研究センター所蔵資料の利用を希望される方は、どなたでもご利用いただけます。
- 開館時間：月～金曜日（祝日をのぞく）10:00～12:00、13:00～16:00
- ただし、立教大学の一斉休業日のほか、資料整理などのため臨時に閉館する場合もあります。その場合はあらかじめセンターホームページなどでお知らせいたします。

閲覧

- 初回に簡単な利用者登録をお願いいたします。
- 資料は閉架式で、貸し出しはしておりません。
- 一部の資料については、プライバシー保護や資料保存などのため閲覧を制限する場合があります。詳しくはお問い合わせください。

【お問い合わせ・ご予約は】

立教大学共生社会研究センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
電話：03-3985-4457　FAX：03-3985-4458
E-mail：kyousei@rikkyo.ac.jp

【2021年度 センター組織】

運営委員会 高木 恒一（立教大学社会学部教授）センター長
市橋 秀夫（埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授）副センター長
石井 正子（立教大学異文化コミュニケーション学部教授）副センター長
小野沢 あかね（立教大学文学部教授）運営委員
沼尻 晃伸（立教大学文学部教授）運営委員
町村 敬志（一橋大学大学院社会学研究科特任教授）運営委員
和田 悠（立教大学文学部教授）運営委員

リサーチ・アシスタント
阿部 晃平（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程2年）
今井 麻美梨（立教大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程2年）
安藤 直之（立教大学大学院文学研究科教育学専攻研修生）
李 英美（立教大学兼任講師）
宇野 淳子（立教大学共生社会研究センター研究員）

スタッフ　平野 泉・川路 さつき

編集後記

今回はRAのみなさんに執筆していただいたのですが、センターではもう2名、今井さんと阿部さんがRAとして勤務してくださっています。お二人は諸事情により現在も在宅でデータ整理の作業中。ボランティアの活動も停止中です。一日も早く、みんなでわいわい作業ができる日常が来ることを祈りつつ、今日もセンターに資料が搬入されました。作業は続くよ、どこまでも。（ひ）

【オンラインセミナーのお知らせ】

立教大学共生社会研究センター主催オンラインセミナー

運動当事者とともにベ平連運動をふりかえる ―関谷滋さんに聞く

日時：2022年3月5日（土）14:00～16:00
開催方法：Zoomによるオンライン開催
参加費無料・定員30名・事前申込要
申込はこちらから　https://bit.ly/3rp1F4W

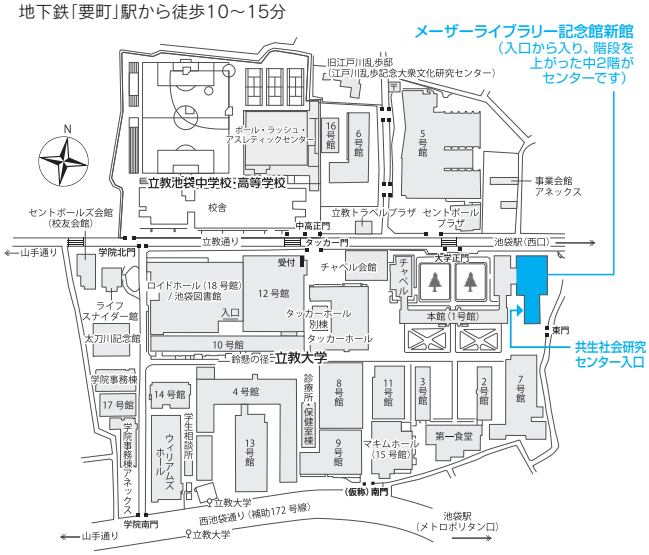
関谷滋さんは、日本におけるベトナム反戦運動の重要な一翼を担った「ベ平連」（「ベトナムに平和を！」市民連合）運動に若手メンバーとして加わり、「JATEC」（＝反戦脱走米兵援助日本技術委員会）でも重要な役割を果たされました。現在は、日本各地で展開されたベ平連運動の掘り起こしを続けている「地域ベ平連研究会」に参加し、みずから当時の運動をふりかえる作業にも取り組まれています。そこで本セミナーでは、関谷氏の運動経験についてお話いただくとともに、運動当事者が、研究者とともに運動を再考する共同作業を行なうことの意義や課題についても考えます。

どうぞ、ふるってご参加ください。

お　話：関谷滋さん（元ジャテック（JATEC ＝反戦脱走米兵援助日本技術委員会）・ベ平連（「ベトナムに平和を！」市民連合）活動家）
聞き手：大野光明さん（滋賀県立大学准教授）
共　催：地域ベ平連研究会

【センターへのアクセス】

JR・私鉄・地下鉄各線「池袋」駅・
地下鉄「要町」駅から徒歩10～15分



PRISM — A Newsletter of Research Center for Cooperative Civil Societies — No.17, Feb 2022

3-34-1 Nishi-Ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo, Japan 171-8501
Tel: +81-3-3985-4457　Fax: +81-3-3985-4458
E-mail: kyousei@rikkyo.ac.jp
http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/

立教大学
RIKKYO UNIVERSITY